

モーツァルト／交響曲第38番 二長調 K.504「プラハ」

モーツァルトの交響曲第38番は「プラハ」と呼ばれている。もはやウィーンでは理解されにくくなっていた晩年のモーツァルトを温かく受けとめてくれたのがこの都市だった。

後期の三大交響曲へと続く円熟期の代表作で、深みをたたえたシリアスな音楽。全曲にみられるポリフォニー技法を凝らした楽想と、リトルネロ形式に近い構成法が第1楽章に生かされているのが特徴である。

全体はメヌエット楽章をのぞいた3楽章構成。第1楽章は主部のモチーフを織り込みながら緊張感のある楽想が奏でられるアダージョの序奏とソナタ形式のアレグロ主部からなる。第1主題に含まれる同音を反復するシンコペーションが全楽章にわたって登場する。第2楽章アンダンテもソナタ形式で、トランペットとティンパニは休み。木管楽器のやわらかい色彩がオーケストレーションの熟達を感じさせる。第3楽章プレストもソナタ形式。歌劇《フィガロの結婚》第2幕のスザンナとケルビーノの二重唱と同じ音型による主題で始まる。管楽器のみのアンサンブルが断片的にはさまれ、朗らかでのんびりした感じの楽想がほっとさせる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。